

オアシス

2005(平成17)年2月25日鑑賞(リサイタルホール)

★★★★



監督・脚本=イ・チャンドン/出演=ソル・ギョング/ムン・ソリ/アン・ネサン/リュ・スンワン/チュ・グイジョン/キム・ジング/ソン・ビョンホ/ユン・ガヒョン (シネカノン配給/2002年韓国映画/132分)

……前科3犯の男と脳性麻痺の女。そんな厄介者同士のホントに純粋な愛を描いた映画がコレ。2005朝日ベストテン映画祭で外国映画トップとなったのも十分わかるが、世俗のアカにまみれた目でこんな映画を観ていると、ちと辛い面も……？ しかしこんな純愛ってホントにあるの？ いや、現実のないものを描くからその映画に感動できるのかも……？ まさに、ホンモノの「演技力」ここにあり！ホンモノの韓国映画ここにあり！の極みだ。

主人公は前科3犯の男！

この映画の主人公ホン・ジョンドウ（ソル・ギョング）は前科3犯。しかもその1つは強姦未遂。そんなジョンドウが、今日はやっと刑期を終えて釈放され、シャバに戻ってきた。季節は冬だが、2年半前に刑務所に入った時は夏だったため、出所の時も夏服のまま。寒空の下、しきりに鼻をすすりながらバスを降りてきたが、どうもこの男の行動には落ち着きがない……。常におどおどとしており、周りの様子を探っているような落ち着きのない雰囲気、物腰がこのジョンドウの特徴……。

ジョンドウは男兄弟3人の真ん中

冒頭、ムシヨ帰りのジョンドウはいろいろなエピソードを見せながらやっと家族のもとへ。といってもジョンドウには妻はいないから、帰っていったのは母親や兄弟たちが住むアパートだ。ジョンドウは3人兄弟の真ん中らしい。長男のホ

ン・ジョンイル（アン・ネサン）はしっかり者。車の整備工場を営んでいる彼は、まじめに働けとジョンドゥを諭し、中華料理屋「香港飯店」の出前の仕事に就かせたが……？ また、弟のホン・ジョンセ（リュ・スンワン）も、ジョンドゥに対して完全に冷めているが、最低限の義務は果たしている。その他、兄嫁（チュ・グイジョン）もジョンドゥのことが嫌いで、ジョンドゥのことを厄介者扱いしていることが明らか。その極みは、大家族主義（？）の韓国では大切な、母親（キム・ジング）の誕生日を祝うための家族全員そろった食事の席に、何とジョンドゥが車椅子に乗せたコンジュを連れてきたこと。こりゃ、いくら何でも無茶苦茶だ……。

ちょっと不可解な行動……？

ムシヨ帰りのジョンドゥが、果物を持って訪れたのは何と事件の被害者のアパート。ジョンドゥは、日本の法律で正確に言えば、業務上過失致死及び道路交通法違反（救護義務違反）、もっとわかりやすく言えばひき逃げの罪で、懲役2年6カ月の実刑をくらっていたわけだ。そのひき逃げの被害者の遺族であるハン・サンシク（ソン・ビョンホ）とその妻（ユン・ガヒョン）は、たまたま今日は引っ越しの最中。ひき逃げの犯人から、「出所したのであいさつに来た」と言われて喜ぶ人間はいないだろう。サンシクは果物を突っ返し、ジョンドゥに対して「帰れ！」と怒鳴ったのは当然……。

ここで考えたいのは、なぜジョンドゥが出所直後すぐに、ひき逃げの被害者宅を果物を持って訪れたのかということ。そして、それはどうも纯粹におわびの気持を示したかったらしい……。この映画をずっと観れば、このジョンドゥならホントにそういう気持になったのかナと納得できるが、この冒頭のシーンだけではそう単純に理解できるものではない。後に3人の兄弟の間で「議論」される、ひき逃げ事故の「真相」が理解できれば、イ・チャンドン監督が描いた、この主人公ジョンドゥの人間的な深みがよりわかろうというものだ。

もう1人の主人公は脳性麻痺の女！

引っ越したサンシク夫婦のアパートの中に1人残っているのは、もう1人の主

人公のハン・コンジュ（ムン・ソリ）。そのスクリーン上の姿は衝撃的！ 脳性麻痺の女性を女優のムン・ソリがどのように演ずるのか？ また、そんな役柄を演じて女優としてプラスになるのか？ パンフレットにある「ムン・ソリ来日記者会見レポート」には、「周囲の人たちからも、この役は女優にとってマイナスにしかないと止められました」と書かれている。

そりゃそうだろう。まともなセリフもなく、「アー、ウー」ばかりのセリフ（？）をしゃべり、顔面をゆがめ、手足を引きつらせ、全身をぶつけていく演技はそりゃ大変！ 演技というより、こりゃ地獄の責め苦に近いものだ。これに比べれば、SM 映画の大作（？）『花と蛇』（04年）で杉本彩が見せた（魅せた）SM の世界における地獄の責め（？）など、まだまだ楽なものと思わず思ってしまったが……？ ムン・ソリがこの映画で見せた演技はまさに神ワザの！ この演技によって彼女が「ベネチア国際映画祭新人俳優賞」をはじめ、「春史羅雲奎映画芸術賞女性演技賞」「映画評論家協会賞主演女優賞」等数々の賞を受賞したのは当然と納得……。

純愛にもいろいろな形が……

この映画は『冬ソナ』と同じ韓国映画。またテーマも『冬ソナ』と同じ純愛。そして流す涙も同じ人間のものだが、その涙の質は全然違うはず。それは、純愛の形が『冬ソナ』のそれと『オアシス』のそれとが全く異質のものだから。この映画が描くのは極端な「厄介者」同士の純愛だが、そんな純愛は、世間の常識にとらわれ、その価値観に隷属し、そういう視線でしか物事や人間の本性を見ることができない私たち凡人が形成している社会において受け入れられるはずがない。ごちなくとも最高の時間を共有していた2人のベッドの上での営みは、世間の一般的な目で見れば明らかな犯罪＝強姦行為だった……。

思い出した『至福のとき』

これもちょっと異質だが、私の大好きな「純愛映画」（？）が張藝謀監督の「しあわせ3部作」の1つである『至福のとき』(02年)。これは、工場をリストラされてクビになった、いわば「負け犬」の中年男と、家族から厄介者扱いされ

ている盲目の少女との「純愛（友情？）」を描いた映画。しかしこの映画では、世間から排除されて社会的弱者になったり、厄介者扱いされていても、まだ普通に生きていけるレベルの人間が主人公だった。そして、そんな弱い者同士が見せるホンモノの心の交流をユーモアを含めてわかりやすく描いていたため、観客はスクリーン上の物語に自分を同化させ、単純に涙を流しながら心ゆくまで感動することができるすばらしい映画だった。

これと対比すれば、『オアシス』は主人公となる男女の「立場」を極端なところまで徹底させたから、そんな男女の「純愛」なんてハナからあり得ないと思ってしまうもの。強姦の犯人として逮捕されたジョンドゥに対して、警察官がジョンドゥを見ながら、「お前、はっきり言って性欲がわくか？」と質問したり、兄のジョニルが「バカ野郎！ お前、それでも人間か。ろくでなし！」と食ってかかるのがよくわかる。

私が同じ立場にいれば、きっと私だって同じような言葉を投げかけているはず。しかし、それはホントは違う……？ キリストが言うように、売春婦に対して石を投げつけることができるのは、「罪なき者」だけのはず……？

もっとも、こういう本来の人間の価値観と法律の役割とは全く別モノ。そう考えると、法律上の真実とか、法律が果たすべき役割なんてごくわずかでしかないということがよくわかるというものだ。だから、私は弁護士の仕事はいつ辞めてもいいが、映画評論の仕事は辞められない……？

2人の純愛成立のポイントは？

この『オアシス』が描く、極端に虐げられた者同士の至福の純愛は、観客に対して絶対にホンモノと思わせる説得力をもっている。しかし、この2人の間に純愛が芽生え順調に育っていったポイントは、第1に、たまたま2人の間の「男女のシグナルの出し方」の波長が合ったことと、第2に、たまたま世間がこんな2人の交流を見逃し、放置したことだ。

2005年2月26日現在、ニッポン放送の株式取得をめぐるライブドアとフジテレビの争いは、新株引受権付き株式の発行差止めを求める仮処分申請という司法の場に発展したが、この争いのテーマの1つが堀江社長が唱える「放送と通信の統

合」。インターネットを中心とした情報通信手段の発展は、一方ではソ連邦の崩壊など世界を大きく変化させたし、他方では男女の愛の交信のスタイルを大きく変えさせることになった。

前科3犯の男と脳性麻痺の女との情報通信ネットワークは電話によるもの。ここに目をつけたジョンドゥはかなり利口。もちろん、コンジュにとっては電話をかけること自体がひと苦勞だし、受けた側もよほど親しい人間でなければ電話でコンジュの話聞いて理解するのは容易ではないが、それでも電話が立派な愛の交流手段となることはまちがいない。そしてジョンドゥがコンジュに対してかけるやさしい言葉や、コンジュに対して示す献身的な行動は立派の一言。「姫サマ」と「將軍サマ」と呼び合うようになった2人は、まさに純愛の真っ只中にあり、幸せそのものだったことはまちがいない。イ・チャンドン監督によるこんな風変わりな男女の純愛形成のプロセスの描き方は、後述のように疲れるものの、お見事の一言。

しかしここで見逃してはならないもう1つのポイントは、このようなプロセス（つまり時間）をとることができたのは、ひとえに社会（世間）が2人のこんな行動を見逃し、無関心だったためということだ。すなわち、誰かが途中でこんな2人のデートの姿やそのアツアツぶりを目にすれば、その時点でその「異様さ」に気付き、何らかの手を打っていたはずだから。

ジョンドゥのもつ二面性

この映画が中盤で描いたように、2人の純愛は結果的にすばらしいものに成長した。しかし他方、最初の出会いにおいてジョンドゥがコンジュに対してとった行動は、後述のように、強姦事件として逮捕された際に、警察官や兄たちが罵倒したセリフどおりのひどいもの。これは、2年半も刑務所に入っていた中で、たまりにたまっていた女への欲望を満たすため、身体が不自由な脳性麻痺の女をターゲットにして無理矢理……というものだから、そりゃ非人間的で卑劣そのものの行為。せっかくシャバに出ることができたのだから、性的欲望の解消くらいはもう少しマシな方法で、と思うのだが……？

釈放された翌日（？）に、コンジュのアパートという密室の中でコンジュに対

してジョンドゥがとった行動は、ジョンドゥのもっているこの二面性のうちの、悪の面を示すもの。そう、彼は神サマのような心をもった純真な人間ではなく、表れ方によっては、ホントに脳性麻痺の女をターゲットにした強姦魔になれるような「資質」をもっているのだ、ということをおさえておく必要がある。

しんどい連続の中、ホッとする瞬間も……

この『オアシス』は、観ていて心底疲れる映画。まず第1に、まるで社会に適応できないジョンドゥの姿を観ていると、それだけでイライラしてくる。社会に適応できないのは、あの「フーテンの寅さん」も同じだが、こちらは、「さくら」や「おばちゃん」をはじめ、正規軍の応援部隊(?)が存在しているし、毎回登場してくるマドンナをはじめ、登場人物すべてが善人ばかり(?)だから、安心しながらその「脱線ぶり」を楽しむことができる。しかし、ジョンドゥの場合はそうはいかない……?

第2に、とにかく脳性麻痺の女性コンジュの姿は、それをスクリーン上で観ているだけでついこちらの身体も引きつり、疲れてくる……? 映画の中盤では、ジョンドゥとコンジュとの楽しいデートを中心としたラブストーリーが展開されるが、このデートの内容が普通でないだけに、「これが2人にとって至福のときなんだ」とわかっていても、身体の節々が痛くなってくるし、神経も疲れてくる。

そんな疲れるシーン(?)の連続の中、心底からホッとできる瞬間は、コンジュが瞬間的に健常者の姿に戻って可愛い顔や美しいスタイルを見せ、やさしくジョンドゥと話し合ったり、歌ったり、ダンスをしたりするシーン。とりわけ笑いを誘うのは、『猟奇的な彼女』(01年)と同じようなアベックの真似をして、コンジュがジョンドゥの頭を小突くシーン。やっぱりこういう心暖まるシーンを観ていると気持ちもホッとするから、人間の見方なんて勝手なもの……?

チョンゲ高架道路とチョンゲ川復元

パンフレットによると、この映画に登場するチョンゲ高架道路上での2人のダンスシーン(?)を撮影するため、高架道路は一時通行止めにされたとのこと。チョンゲ高架道路は韓国の首都ソウルの中心部を走るものであるうえ、韓国の道

路事情は日本以上の超過密だから、そんな処置は超異例……？

また、私がチョンゲ高架道路と聞いてピンときたのは、私のライフワークである都市問題のテーマとして最近有名な、ソウルにおけるチョンゲ川復元工事。これは、「水の道」を再現し、ソウルを都市再生させるべく、それまで道路を走らせるため暗渠とされていたチョンゲ川を誰の目にも見えるものに復元するという壮大な都市改造計画。

大阪でも「水都再生」のかけ声のもとに、川を浄化しその川に船を通行させる都市再生計画が進んでいるが、ソウルのチョンゲ川復元工事は、これとは規模も金額もケタ違いの国家的大プロジェクトだ。そんなチョンゲ川の上にあるチョンゲ高架道路が、2人の愛のシーンの象徴的な舞台として使用されたことも、この映画の値打ちの1つ……？

知的障害者をめぐる法律問題あれこれ

知的障害者であるために発生する法律問題は多い。この映画の中で描かれるのは、知的障害者であるために発生した性的暴行事件と住宅問題。私も弁護士生活30年の中で1人の知的障害者（A女）の財産管理をめぐる大事件を担当したことがある。知的障害者であっても親の莫大な財産を遺産相続することがあるが、その場合、その知的障害者の財産管理が大変な問題となる。周囲の人たちが親切心でA女の面倒をみているうちはいいが、そのうち、多かれ少なかれ「財産目当て」の様相を呈してくるのが人間社会の常……。

そんな動きの中、それまで事実上の財産管理をやっていたB氏が「ヤバイ」とみなされ、法律上の財産管理を私が弁護士として引き受けることになった。そんな中、ある日突然A女が死亡！ ここから私の大変な毎日が始まることになったが……？

身障者住宅あれこれ

身障者の住宅問題も深刻だ。大阪には「同和問題」があり、いわゆる「同和住宅」というものがある。この同和住宅は家賃は格安で、結構便利な場所に建てられている。

この『オアシス』では、コンジュが脳性麻痺の障害をもっているため、3LDKの身障者向け住宅に住むことができるようになった話が描かれる。映画冒頭の、サンシク夫婦の引っ越しがそれだ。しかし、ちょっと話がおかしいのでは……？ そう、それならなぜコンジュはサンシク夫婦の前のアパートに残り、サンシク夫婦だけが引っ越したのだろうか？ これはつまり、日本でもよくある(?) 脱法行為によるもの。映画でも、ホントに身障者が身障者向け住宅に居住しているかどうかのチェックにくる市の担当者の姿が描かれているが、こんなチェックをごまかすのはチョロイもの……？ そのごまかしのテクニックも、この映画で十分学ぶことができるよ……？



何とも象徴的なタイトルと1枚の絵

砂漠の中にあるオアシスは砂漠を行き交う人々にとって不可欠なものだし、最大の清涼剤となるもの。世間の常識にとらわれ、世俗の価値観にまみれた私たち一般の社会人や健常者にとっては、ジョンドウとコンジュがこの映画の中で見せるホンモノの純愛は一種の清涼剤となるもの……。その意味で、この映画のタイトルを『オアシス』としたのはピッタリ。

しかしそれ以上に何とも意味シンで哲学的な内容をもたせているのは、コンジュの部屋に飾ってある「オアシス」というタイトルの1枚の絵。夜になると、その絵には月明かりの中で外の枝木が写っている。普通の人にとっては何でもないものだが、コンジュにとっては、時としてその絵に写る枝木が不気味で怖い……。そんな気持ちを打ち明けられたジョンドウは、ある日のデートにおいて、魔法でこれを消してやると宣言したうえで、ケツタイな呪文を唱え、見事にそれを実行した……？ 強姦事件によって逮捕されながら、とっさの機転で警察署を逃げ出したジョンドウは、コンジュに対する最後かつ最大の愛の証として、のこぎりを持ってその木に登り、枝木を切り始めた……。こりゃ、誰だって涙なくして観ることができないホンモノの純愛！ 『オアシス』というタイトルがもつ言葉の深みを十分に味わおう。

2005(平成17)年2月25日記